

巻頭言

私と「海外・帰国子女教育問題」について

土肥 豊 (大阪教育大学)

大江健三郎の著作に『遅れてきた青年』という作品があるが、私と「海外・帰国子女教育問題」との関わりにおいても、そのような「遅れてきた青年」という思いが常に付き纏ってきたように感じる。というのは、「海外・帰国子女問題」が日本の教育問題・社会問題として盛んに取り上げられていたピーク時を過ぎて、私がその問題に関わりはじめてからであり、最近では、目先のきく研究者は別の問題へ関心を移している傾向があると思えるからである。

私が「海外・帰国子女教育問題」に関わるようになったのは、1988年に現地調査を実施したシンガポール日本人学校の調査研究にはじまる。それまで、大阪教育大学の社会学研究室では、学生の調査実習として、毎年夏休みを利用して日本国内（主に近畿地方）の農山村調査や漁村調査を実施してきたにのことも、ある意味では、都市生活者にとっては

「異文化体験」ということになるかもしれない）が、国際化時代の到来と共に、海外調査への夢と希望が大きく膨らんだので、社会学研究室に関わる教官、学生、卒業生とで組織している大阪教育大学社会学研究会の1986年8月の研究例会において有志を募り、海外学術調査の研究会を発足させた。幸いシンガポール日本人学校の派遣教員として勤務した経験のある卒業生がおられたので、第1回の調査目標をシンガポール日本人学校に定めた経緯がある。その後、アジア地域を中心に、台湾（台北・台中・高雄）、タイ（バンコク）の日本人学校の調査を実施し、また、アジア・太平洋圏ではあるが、欧米文化圏の影響の強いオーストラリア（メルボルン・シドニー）や欧州文化圏の周辺に位置するロシア（モスクワ）の日本人学校へと、より異なる文化圏に調査対象を拡げ、海外日本人学校の比較研究を目指すようになる。さらに、欧州文化圏の中央に位置するドイツ（フランクフルト・ミュンヘン）や北米地域のアメリカ（ニューヨーク・シカゴ）では調査対象を日本人学校と補習授業校にも拡げ、海外子女教育の比較研究を目指した。そして、今年（2004年8月）の岡安では、残された地域のひとつである中南米地域で、海外在留邦人数としては、アメリカ、中国に次いで多いブラジル（サンパウロ・リオデジャネイロ）を調査対象に選び、日系人も多いことに留意して、日系人の経営する学校の調査も実施することで、日系人も視野に入れたより異なる角度からの比較研究を目指している。

前号で巻頭言を書かれた上久保達夫氏とは、上記のシンガポール日本人学校の調査研究から一緒に海外・帰国子女教育に関わるようになり、上久保氏の紹介で、「帰国子女教育を考える会」の小島勝現会長とも知り合うことになり、マレーシア、中国、オーストラリアへの共同調査にも参加させて頂き、現在では、記録担当の運営委員として当会の裏方とし

て関わっている。

それでは、今までの海外日本人学校等の調査研究を踏まえ、また、当会との関わりも含めて私が「海外・帰国子女教育問題」について気づいたことをいくつか述べておこう。前回（第49回）の研究例会でも金梅研事務局長の生野先生が発言されていたが、海外日本人学校等の海外経験のある教員が日本全国に約1万1千人いるのに、一部の金海研等の先生方による実践を除いて、その貴重な海外経験が日本の学校社会ではあまり生かされていないということは不思議なことである。もっとも、最初から自分の出世コースの一環として海外派遣を目指す教員や自己保身を最優先に考える教員も多いのかもしれない（そういう教員にも海外日本人学校の調査の時に会ったような気がする）が、異文化体験をし、その体験を活かして、日本の学校教育を大きく変えていく志や潜在的な可能性を秘めているながら影響力を及ぼすことができないのは残念なことである。その原因はどこにあるのであろうか？その原因を突き詰めていくと、日本の学校社会、学校文化、教員社会、教員文化、あるいは、日本の伝統社会、伝統文化、地域共同体、コンセンサス社会等の問題に突き当たるのかもしれない。かつての大阪府下の教員の場合は、海外派遣教員になるよりも府下の教育困難校で苦労・努力する教員を評価する傾向があったし、海外派遣教員は半分遊びに行ってるぐらいにしか見られていなかった時期もあったようだ。大阪教育大学でも、人権教育や在日外国人教育には力を入れていても、海外・帰国子女教育については無視されるような雰囲気があったように思う。最近でこそ、ようやく「国際理解教育論」という科目等がカリキュラムの中に入ってきたりして、海外・帰国子女教育問題にも少しは触れる授業も出てきてはいるが…。また、私の周辺（身内、友人、知人）の教員に聞いてみても、実際の公立学校（小・中・高）の教育現場では毎日様々な問題に追われていて、帰国子女問題の優先順位はあまり高くないという現実にも突き当たるようだ。日本の学校教育現場を変えていくにはまだまだ時間がかかりそうであるが、それでも様々な動きや「異文化」との出会いが日本の学校や社会を少しずつ変えていくのだと思う。今年8月のブラジル調査でサンパウロの日系人の経営する学校に行った時、その学院長が「『国際化』と言ってる間は、何時まで経っても国際化はしませんよ」と発言されたのは示唆的であった。

最後に、「帰国子女教育を考える会」の研究例会も50回を迎えようとしているが、この「考える会」からは「遅れてきた青年（中年？）」として色々学ばせて頂いたし、「考える会」そのものも多様な異なる立場や異なる文化（教員、企業、親、学生、研究者等）を媒介する場や情報交換の場として貴重な会となっている。今後ともその貴重な役割を細々とでも果たしていく必要があるであろう。